

大谷大学 自己点検・評価報告書  
2013 年度

真宗学科

仏教学科

哲学科

社会学科

歴史学科

文学科

国際文化学科

人文情報学科

教育・心理学科

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：真宗学科

記入責任者：藤嶽 明信

基準：4-3、6	<評定> S <自己点検・評価委員会評定> S
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
第 1 学年時における指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
2012 年度実施により効果が確認できたので、2013 年度も引き続いて、学習意欲開発のための企画として、第 1 学年においては、学外講師を招聘しての講演会とそれに基づく教員も参加しての座談会を実施する。 ○講演会を実施する。真城義麿氏を講師として 11 月 19 日（火）に実施する。 ○講演会を踏まえて座談会を実施する。（4 名の指導教員が第 1 学年全体の学生を把握し指導するために、座談会の司会は、クラス指導教員以外が担当する。） ○講演会・座談会についてのレポート提出を課す。（今年度は、座談会に関しても書かせる。） ○4 名の指導教員はレポートの提出状況を相互に確認をする。 ○レポートの内容に記述された学生の関心や感想を 4 名の指導教員が共有し、学生指導に資する。 ○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
※行動計画は、全て実施できた。 学習意欲開発のために学外講師講演会・座談会を実施した。 日時：11 月 19 日（火）第 3 限 講演会（メディアホール） 講師：真城義麿氏（前大谷中・高等学校校長、善照寺住職） 講題：「学ぶこと・分かること」 第 4 限目に 6 班に分かれて座談会（響流館演習室 1～6） ○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
第 1 学年の学外講師を招いた講演会と座談会は、終了後のレポートによると、普段の演習 I の授業とは異なった幅広い視点から真宗の学びについて考える良い機会となり、座談会という形式にも新鮮味があったようで、期待された効果があったと認められる。座談会における発言やレポートを通して学生の関心や考えを教員が把握し、それを学生指導に活かすことができた。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
・参加学生のレポート（別紙コピー①、②-1,2）	
<自己点検・評価委員会使用欄>	
<所見>	
本項目については、目標・行動計画に基づいた活動が行われ、学生レポートからも効果をあげていると判断できる。今後も引き続き取り組んでいただきたい。	

番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：真宗学科

記入責任者：藤嶽 明信

基準：4-3、6	<評定> S <自己点検・評価委員会評定> S
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
第 2 学年時における指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする	
[行動計画]	
2012 年度実施において効果が認められたので、2013 年度も引き続いて、学習意欲開発のための企画として、第 2 学年においては、比叡山登山を通してのフィールドワーク（親鸞の足跡を巡る）を実施する。 ○実施に先立って事前学習を行う。 ○比叡山登山および諸堂巡りを秋に実施する。[10 月 26 日（土）で日程を調整中] ○登山や諸堂巡りにおいては、教員は出来るだけ多くの学生と接触を持ち、学生の把握に努める。また学生同士もクラスの枠を超えて交流できるように促す。 ○登山後に感想レポートを課す。 ○4 名の指導教員は感想レポートの提出状況を相互に確認する。 ○4 名の指導教員は、登山・諸堂巡りや感想レポートを通して知り得た学生に関する情報を共有し、自分の担当クラスだけではなく、第 2 学年の学生全体の指導に責任をもって当たるようにする。 ○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
※行動計画は、全て実施できた。 学習意欲開発のためフィールドワーク（親鸞の足跡を巡る）を実施した。 10 月 26 日（土）9 時大学集合、天候不順のため比叡山ケーブルカーを利用して入山し、諸堂を巡った後、午後 2 時に現地解散。 ○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
第 2 学年の比叡山登山とフィールドワークは、終了後の学生のレポートによれば、親鸞の足跡を自分の足で辿ることを通して、その生涯と思想について主体的・共感的に考える機会となり、学びを深める効果が上がっていると認められる。一緒にフィールドを歩く中で学生と教員、学生同士の距離が縮まり、より細やかな指導の機会となった。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
・大学 HP 掲載の実施報告（別紙コピー③） ・参加学生のレポート（別紙コピー④）	
<自己点検・評価委員会使用欄>	
<所見> 本項目については、目標・行動計画に基づいた活動が行われ、学生レポートからも効果を上げていると判断できる。今後も引き続き取り組んでいただきたい。	

番号 ③

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：真宗学科

記入責任者：藤嶽 明信

基準：4-3、6	<評定> S <自己点検・評価委員会評定> S
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
第 1 学年から第 2 学年への移行時における指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
第 1 学年から第 2 学年への接続や展開のために、第 1 学年の「学習計画レポート」を踏まえて第 2 学年冒頭での面談指導を 2013 年の年度初めに実施する。 ○第 1 学年の春休みに、3 課題（①一年間の学びを振り返る。②学びにおける疑問や課題を整理する。③これからの学習計画を記す。）の「学習計画レポート」（1,000 字以上）を課す。 ○レポートは、第 2 学年初めのクラス別懇談会時にクラス指導教員に提出する。 ○指導教員は、提出されたレポートを踏まえて、学生に対する面談指導をオリエンテーション期間中に実施する。予てより、第 1 学年の緊張が緩む第 2 学年の学生指導は課題としてあった。そのことも踏まえて、面談指導に際しては、必要に応じて第 1 学年の指導教員と連絡を取り、学生の実情を把握した上での学生指導を心がける。 ○面談指導に際しては、学生の状況を見ながら履修モデルも活用する。 *以上の項目については、本年度初めに既に実施した。 ○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
第 1 学年から第 2 学年への接続のために、第 1 学年の春期休暇課題としてレポートを課した。第 2 学年の指導教員は、提出されたレポートを踏まえて、学生に対する面談指導をオリエンテーション期間中に実施した。面談指導に際しては、必要に応じて第 1 学年の指導教員と連絡を取り、学生の実情を把握した上での学生指導を心がけた。また面談指導に際しては、学生の状況を見ながら履修モデルも活用した。 ○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
レポートの作成は、学生自身にとってこれまでの学修を振り返ると共に今後の学修を考える好機となっている。またそのレポートを踏まえての面談指導は、指導教員にとって学生の実情や関心を把握する良い機会となっているし、その後の学生指導にも有効なものとなっている。	
[改善すべき事項]	
特になし	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
・春期休暇課題指示のプリント（別紙コピー⑤） ・提出された課題レポート（別紙コピー⑥3 頁）	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
本項目に関しては、目標・行動計画に基づいた活動が行われ、第 1 学年から第 2 学年への移行時における指導体制の充実に向けての学科の取り組みは十分評価できる。今後も引き続き取り組んでいただきたい。

番号 ④

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：真宗学科

記入責任者：藤嶽 明信

基準：6	< 評定 > A < 自己点検・評価委員会評定 > A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
履修指導の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>真宗学科の学生が学科および大学における学びを体系的にイメージできる履修モデルを作成し提示することを旨とする。試みとして、第 2 学年初めの面談指導時に、履修モデルを教員の手控えとして持ち、学生の状況を見ながら活用する。</p> <p>○2013 年度初めの面談指導に間に合うように履修モデルを整える。</p> <p>○年度初めに第 2 学年の面談指導を実施する。その際には「学習計画レポート」も踏まえながら、まず学生の学習の上での状況や関心を把握することに務める。</p> <p>○教員は履修モデルを手元に置きながら、必要に応じて履修モデルを活用する。</p> <p>*以上の項目に関しては 2013 年度のオリエンテーション期間中に実施した。</p> <p>この面談指導を通して、履修モデルを用いての学習指導が相応しい学生とそうでない学生があるという学生の状況が浮かび上がってきた。そこに学生の実情を十分に踏まえたきめ細やかな学習指導がなされなくてはならないという課題も見えてきた。そもそも履修モデルの活用とは、学生を何れかの履修モデルに無理に当て嵌めるといったようなことではない。このことは履修モデル設定に当たって既に確認されていた事項である。したがって、学生の状況が見えてきた現段階においては、【目標】を「履修モデルの設定」から「履修指導の充実」に変更し、学生の状況を把握した上で、必要に応じて履修モデルも活用して、履修指導を充実させていくようにする。</p> <p>○以上のような趣旨に則り、第 2 学年の後期にも、第 3 学年のゼミ決定も視野に入れた履修指導を実施する。</p> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。</p>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
<p>○オリエンテーション期間中の面談指導に間に合うように履修モデルを整えた。</p> <p>○面談を通して、履修モデルを用いての学習指導が相応しい学生とそうでない学生があるという学生の状況が浮かび上がってきた。そして、学生の実情を十分に踏まえたきめ細やかな学習指導がなされなくてはならないという課題も見えてきた。そこで 2013 年度の【目標】を「履修モデルの設定」から「履修指導の充実」に変更し、学生の状況を把握した上で、必要に応じて履修モデルも活用して、履修指導を充実させていくようにした。</p> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。</p>	

<b>3. 【点検・評価】</b>
[効果が上がっている事項]
<p>○2013年度初めのオリエンテーション期間に間に合うように履修モデルを作成した。</p> <p>○履修モデルを用いることが相応しい学生には活用し、学生の学習関心を拡げたり整理したりする資料とすることができた。</p>
[改善すべき事項]
<p>○現状では第2学年の後期の終わりに第3学年のゼミの紹介とゼミ決定のための注意事項を伝えていますが、個別の履修指導にまでは至っていない。個別指導も視野に入れた履修指導の実施を検討すべきである。</p> <p>○履修指導の効果を確かめる方法についても検討すべきである。(一案として、第3学年時に第2学年時の履修指導に関するアンケートをとるなど)。</p> <p>○第3学年に編入学生のための履修指導についても、別途方法を考えていく必要がある。</p>
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>
<p>・「2013年度真宗学科履修モデル」(指導教員用)(別紙コピー⑦)</p>

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>本項目に関しては、目標・行動計画に基づいた活動が行われ、履修モデルを活用できる体制を整えた上で、個別面談を通して、個々の学生の実情に応じた履修指導の充実を図ろうとする学科の取り組みは十分評価できる。今後、履修指導のさらなる充実に向けて取り組んでいただきたい。</p>

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：仏教学科

記入責任者：織田顕祐

基準：5	<評定> C <自己点検・評価委員会評定> B
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
志願者増に向けての広報活動の強化。	
[達成基準]	
入学定員を満たすこと。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教員による高等学校訪問の計画的に実施する。</li> <li>2. オープンキャンパスを利用した在学生と高校生の交流を実施する。</li> <li>3. 真宗学科と協同した寺院子弟への交流懇談会を実施する。</li> <li>4. 社会人を大学に誘導するための具体的な方策を検討する。</li> </ol>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
<p>行動計画 1 は、入学センターと協同して 6 月末～9 月初旬にかけて 24 校訪問した。2 はオープンキャンパス特別企画「在学生による学び紹介-お念珠を作ってみよう」を企画実施した。3 は同窓会夏季八十講に合わせて関東地区 5 会場で実施した。4 についてはまず「教員免許更新講習」に連動させるような仕組みを構想すべきであるとの見通しを得た。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>行動計画の実施がどの程度学生募集に関係しているかは未知数。学生募集に関して未知数であるが、学科教員や在学生の協力を得ることができ、学科の危機感共有は深めることができた。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>現実に入学者が減少しているので、効果が上がっているとは言えない。          行動計画 1、については有効性に疑問があるが、オープンキャンパスに学生を導けるよう計画的に実施すべきである。2 も 1 と同様で泥縄式に実施するのではなく早めの準備が必要。3 はもう少し具体的な寺院子弟導入の方法を考えるべきである。4 は具体的な内容を企画し次年度に実施すべきである。2013 年度の行動計画以外の方法についても学科全体で模索し続ける。</p>	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<p>&lt;所見&gt; 入学定員を満たすという目標は出来ていないが、それに向けての行動計画は着実に実行されている。今後、いっそうの努力と現状の分析が望まれる。</p>



番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：仏教学科

記入責任者：織田顕祐

基準：4-2	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> B
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
新 3 コースに対応した教育・研究体制の確立。	
[達成基準]	
新 3 コースの演習Ⅱ・演習Ⅲの具体的な教育内容を決定し、それに対応した教材の準備、教材研究を実施する。特に新 3 コースでは、2 学年と 3 学年を合同とする予定なので、2 年間にわたる計画的な教育内容を明確にする。	
[行動計画]	
1. 新 3 コースの直接的担当者と責任者を決定したので、まず当事者同士が具体的な教材・教育方針を相談する。 2. 10 月をめどに相談内容を学科で共有し、問題点を検討する。検討結果をふまえて次年度用シラバスを作成する。 3. シラバスの内容を学科内で共有し、問題があれば検討する。 4. 各コースの設置意義と教育内容を公開する。具体的には 2014 年度末に論文化するための準備を進める。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
行動計画 1、2、3 は順に実施し、既にシラバス記入を終え、学科内で共有している。また 1 月 9 日に 1 学年学生に対するコース説明会を実施したので一応達成できた。行動計画 4 の「公開」の方法を現在検討中。論文化の準備も現在検討中。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
行動計画の有用性については来年以降の検討課題である。本年度は行動計画内容の実行にあたり頻繁に学科教員が議論する必要がある、その点で学科への求心力を深めることができた。	
[改善すべき事項]	
当面、来年度実施の演習Ⅱの内容検討に尽力したため、演習Ⅲ、演習Ⅳ（現在、卒業論文指導を内容とする計画）の連携についての議論が未消化である。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見> 今年度は 2 年計画の初年度で、行動計画は直実に実行に移されているが最終的な達成基準に達したとは言えない。むしろ新たな課題も見えてきたようなので次年度に期待したい。



番号 ③

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：仏教学科

記入責任者：織田顕祐

基準：6	< 評定 > B < 自己点検・評価委員会評定 > C
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
きめ細かい学生指導を実施し、原級留置・卒業保留率を減少させ、学生が主体的に学ぶような仕組みを構築する。	
[達成基準]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いわゆる「留年率」を減少させる。2012 年度は 1→2 学年の留年率 8.3%、2→3 学年の留年率 15.4% であった。これを確実に減少させる。</li> <li>・卒業論文提出率を向上させる。2012 年度に卒論提出資格なしと判定されたものが学年の 10% 存在した。まずこの比率を減少させる。</li> </ul>	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 演習 I～III の授業内容を完全な学生参画型に改める。そのためのノウ・ハウの研究と実施。</li> <li>2. 演習担当教員と指導学生の個別面談を実施する。(I セメスターに一回程度)</li> <li>3. 学生の抱える「問題」を学科内で正しく共有する。(毎月実施している学科昼食会を利用する)</li> <li>4. 各授業のディプロマポイントを明確にし、学科全体のカリキュラムマップを構築する。</li> </ol>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
<p>計画3について</p> <p>仏教学科には様々な問題をもって入学する学生があるが、毎月実施している定例の学科昼食会で、それらの学生の抱える「問題」や、その対応策について継続的に話し合った。しかし、結果的には各指導教員にまかせ、学科全体として対応できなかったことに課題が残った。計画1, 2, 4 については、今年度は取り組むことができなかった。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
学科昼食会では、教員の感じている学生の抱える「問題」のことが頻繁に話題になるようになった。	
[改善すべき事項]	
行動計画 1 は各授業によって様々で、学科全体として取り組むことができなかった。行動計画 2 も、同様である。主任としてのもう少し強い要請が必要であった。行動計画 4 も現在カリキュラム移行中であり、具体的な検討に入ることができなかった。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
<p>&lt; 自己点検・評価委員会使用欄 &gt;</p> <p>&lt; 所見 &gt; 「行動計画」の実施が不十分であることが問題である。実現可能な行動計画を立てて、着実に実施してゆくべきであろう。</p>	

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：哲学科

記入責任者：渡辺啓真

基準：6	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
初年次における定着率の上昇（初年次学生の大学への帰属意識を高めさせることによって、中途退学を防止し、大学での学びを軌道に乗せる。）	
[達成基準]	
(1) 全員に面談できたか。 (2) 年度末に、2013 年度入学者の退学および休学の数を確認し、前年度と比較して改善が見られたか。	
[行動計画]	
(1) オフィスアワーを利用して、全員の面談をする。これは、学生個々人の把握ということもあるが、同時に、授業、部活・サークル、友人関係以外の居場所を意識させ、様々な形で大学に居られるということを実感してもらう狙いがある。 (2) 個別面談をふまえ、必要に応じて、再度の面談など、適切なフォローを行う。 (3) 退学、休学の理由に関しても、把握できる範囲で分析する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
(1) 全員への面談については、前期演習 I のクラスにおいて実施した。実施方法は、1～数名にわけて、時間調整の上、一定の期間をかけて順次全員に行うことができた。また、前期と後期の指導教員のあいだで 9 月の引き継ぎ時に前期の出席状況、問題点などを伝達し、連携につとめた。 (2) 前年度（2012 年度）末の状況は、新入生 62 名中、退学者 8 名、休学中 2 名であったが、2013 年度新入生については、2014 年 1 月末時点において、65 名中、退学者 2 名のみとなっており、今年度新入生については、昨年度より退学・休学者数が大幅に減じている。ただし、昨年度は 2013 年 2、3 月における退学・休学手続き者がいるため、年度末にかけて状況をフォローする必要がある。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
昨年度同様、各学生の志望動機、在学中の学習計画、卒業後の進路、あるいは学内外でのサークル等活動など、個別指導の参考となる状況把握ができた。就学上の困難を来す身体的・精神的な不安を抱えている学生は少なく、前期から休学等の相談になるといった学生はいなかった。その他、学生生活上の具体的な不安点などについてもある程度把握できた。退学者は 2 名にとどまり、昨年度と異なり進路変更の相談者も出ていない。	
[改善すべき事項]	
昨年度もあげたが、1 回の面談では十分に把握しきれない点を個別にフォローすること。また、前期と後期の指導教員の間での連携などについては今後もさらに配慮していく必要がある。	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

2012 年度における新入生の退学者・休学者の人数は比較的多かったが、2013 年度ではその数が大幅に減少しており、おおいに改善されたものと評価できる。「行動計画」にも記されているように、とくに初年次の学生にとって、大学内での「居場所」を確保し、大学での学びを軌道に乗せるために、教員が積極的にサポートすることは重要であると思われる。今後も同様の成果をあげるべく、引き続き長期的な取り組みを工夫していただきたい。

番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：哲学科

記入責任者：渡辺啓真

基準：4-3	<評定> B <自己点検・評価委員会評定> B
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
卒業論文提出率の上昇（論文執筆のための調査・考察の方法や、論文表現の技法を身につけさせる。そのことによって、卒論を完成・提出する率を上げると同時に、文章を読解しまた表現する能力を養う。）	
[達成基準]	
(1) 卒業論文提出率を、前々年度、前年度と比較して改善が見られたか。 (2) 2013 年度 3 年生の年度末における卒業論文提出資格不可者の数を確認する。	
[行動計画]	
(1)2年次から、ゼミの中で何らかのテーマに基づいた文章を書かせて、それをゼミで共有し、また教員が添削することで、自分の表現と周囲の理解の間に差があることを実感させる(自分の文章が他人の目にさらされ、その評価が自分に返ってくるという経験を繰り返して、その経験を文章表現の洗練に反映させる)。例えば、3年生の時点で「大学での学びの内容」を表現できるかを確認する(このことは、研究の内容を明確化することに役立つと共に、就職活動において大学での学びをアピールすることにも繋がる)。学年が進むにつれて段階的に文字数を増やしていき、卒論の準備への技術的・心理的障壁をできるだけ取り除くことを目指す。 (2) 各学期において、早い時期から期末レポートの作成を意識させ、時間を書けてレポート作成に取り組むように促す。 (3)各ゼミの特色を生かした指導を工夫する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
(1)卒論の提出率は、2011 年度が 82.4%(61/74)、2012 年度が 87.9%(51/58)、2013 年度が 80.0%(44.55) となっている。2011 年度から 12 年度にかけては、改善が見られたが、2013 年度は 2011 年度以下の水準に落ち込んだ。 (2)2015 年度卒論提出資格者の数については、報告書作成時点では確定しておらず把握できなかった。過去の数字を見ると、2011 年度は、85 名在籍のうち、資格無しは 0 名、2012 年度は在籍者 64 名中、資格無し 2 名、2013 年度は、在籍者 62 名中、5 名が提出資格無しであった。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
(1)(2)ともに、客観的データとしてみると効果は出ていない。行動計画にある、年次があがるとともにレポートの枚数を増やしたり、発表、添削や相互評価などを導入したりするなど、ゼミごとの取り組みは継続的に行われており、年度末レポートにおいても、冬期休暇前からレポートのテーマをエントリーして早めに取り組むなどの結果、長文のレポートの提出にも戸惑いが少なくなっている。	

**[改善すべき事項]**

目立った改善は見られないものの、効果をあげるには長期的な取り組みが必要と思われ、これまでの行動計画を継続することがまず必要であると考え。そのうえで、提出済のレポートについての添削や面談を行い、書き直しをさせるなど、次のステップに向けてのよりきめ細かい指導を工夫することが必要である。

**4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること**

2011 年度および 2012 年度卒業論文提出状況

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

**<所見>**

「卒業論文提出率の上昇」を達成するために、「行動計画」に示されるような作文指導、発表と相互評価、あるいは長文レポートの計画的な執筆などの取り組みを、ゼミごとに継続的に実施してきた点は評価できる。しかしながら、2013 年度の卒論提出率は、卒論提出資格不可者の人数とともに、2011 年度、2012 年度以下の水準に落ち込んでおり、さらなる改善が望まれる。今後もさらにきめ細かい取り組みを工夫して、成果をあげていただきたい。

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：社会学科

記入責任者：志藤修史

基準：6	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
「就職力」の向上	
[達成基準]	
仕事や就職に対する関心を、「知る」、「調べる」、「体験する」など具体的行動へ結びつけることのできる学生を増やす。	
[行動計画]	
NPO 法人あったかサポートによる講演会及び演習を実施する。特に就職活動を始める 3 回生の参加を呼び掛ける。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
2013 年 10 月 9 日に学科 3 回生を対象に、NPO 法人あったかサポートによる講演会を実施。3 回生の学生を対象とした事前のアンケートに基づいて、就職活動時の疑問や不安などについての講演とワークショップ方式での講義を実施。具体的な求人内容を「知る」。また、そこに書かれてある情報に関わる法や規則を「調べ」た。学科の 3 回生約 100 名の参加であった。受講した多くの 3 回生は、就職活動に励んでいる。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
実施 3 年目であるが、就職する際の履歴書の見方。就職活動に対する学生としての必要な視点を学び、実際の就職活動に活かしている。当日の学生アンケートでも「役に立つ」という感想が多い。また本学科の就職内定率もほぼ高率で推移しており、講演内容が具体的な就職活動の際の参考になっているものと思われる。	
[改善すべき事項]	
就職活動を行う直前のタイミングでの講演であり、参加者も多いが、4 回生の初期にも同じ内容でのワークショップなどが行われれば、さらに就職活動がスムーズにいくと思われる。現在のものに加え、開催回数をふやせばいいのではと考えている。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
① NPO 法人あったサポート講演会資料 ② 本学科過去 3 年間の就職内定率推移（本学キャリアセンター作成）	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見> 就職に対する意識を高めるという点で、実際の求人票を用いて行う意味合いは大きく、就職内定率の推移を見ても効果は出ていると判断できる。今後、同じことを何度か行うのも一つの方法ではあるが、学生のアンケート結果を集約して分析することも大切ではないかと考える。継続して取り組まれることを期待する。

番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：社会学科

記入責任者：志藤修史

基準：4-3	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
社会に貢献できる生き方を実践する力をつけるためのアクティブ・ラーニングの実験的实施	
[達成基準]	
アクティブ・ラーニングのプログラムに向けた開拓的授業を各学年で実験的に実施し、適宜報告書としてまとめる。	
[行動計画]	
1 回生の演習における地域高齢者の伝記作成、2 回生の「フィールドワーク」における調査演習、3 回生の社会福祉実習に向けた現場職員との事前ワークショップ並びに実習など各学年において開拓的プログラムを実施。同時に、ボランティア活動への積極的参加、学生による地域の社会福祉施設へのヒアリング調査などを実施することで、社会への貢献や社会参加などの実践力を身につけるためのプログラムについて検討する。なお、実施した内容についての成果は報告書としてまとめる。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
1 回生の伝記作りはゼミ単位で取り組み、20 名の学生による聞き取りと伝記作成を実施した。2 回生の「フィールドワーク」は講義にて取り組んだ。社会福祉実習に向けた現場職員との事前ワークショップは社会福祉学コースの 3 回生全員が参加し、社会福祉施設の職員との実習のポイントや、事前の学習の内容等について意見交換を行った。ボランティア活動については滋賀県内の社会福祉協議会での雪かきボランティア、聴覚障害児の放課後学童、北区内の高齢・障害・児童領域での居場所づくり事業へのヒアリングのボランティアなどの紹介を行い、希望者を募った。参加人数は 10 名程度であった。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
問題の発見と具体的な調査やアンケート、制作物の作成など学生にとっては非常にハードルの高い内容を要求しているが、積極的にかかわる学生がほとんどであり、社会学を学ぶことの楽しさにつながっている。	
[改善すべき事項]	
現在はゼミ単位、講義単位で行っているが、学科全体としての取り組みとしての発展を考えている。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
① フィールドワーク報告書 ② 社会福祉実習報告書	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
実験的とはいえ、4 年生をのぞく全学年を通して取り組もうとしている姿勢は評価できる。「フィールドワーク」・「ボランティア」のそれぞれにおいて報告書を作成しており、実践を通じた問題発見力だけではなく、文章力を養うという試みにもつながり、両面において成果が期待される。今後は実習協力先との連携を保ちつつ、無理のない範囲内で人数を拡大していくことを望む。



番号 ③

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：社会学科

記入責任者：志藤修史

基準：4-2	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
社会の問題への対応力を向上させるための新たなカリキュラムの構築	
[達成基準]	
社会問題への対応力を備えた人として学士課程を修了でき得るようなカリキュラムの再構成を進める。今年度はコース再編のプロジェクトを立ち上げ、その中で検討を進める。	
[行動計画]	
少人数でのアクティブ・ラーニングをコアに、アディクションや DV、孤立死など、現代の社会の諸課題に対応している NPO などの市民団体・組織において活躍でき得る力をつける学びのプログラムを検討し、新たなコース編成について報告を行う。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
5 月より学科の教員 4 名でのプロジェクトを立ち上げ素案作りをすすめた。プロジェクトでは、NPO などの市民団体・組織において活躍できる力をつけるための学びのプログラムについて検討した。10 月以降は学科教員全体で議論を進め、2015 年度よりスタートする新コースでのカリキュラム改変と合わせ、既存の現代社会学コース、社会福祉コースそれぞれのカリキュラムの見直しを行い、コース再編案として提案を行った。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
学科・コース再編に向けた具体的な動きができた。 今後、より具体的なカリキュラムの内容について学科内および実習やインターンシップ先との調整をしていく。	
[改善すべき事項]	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
① 社会学科のコース再編に向けた提案 ② 新カリキュラム	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
新プロジェクトに向けて学科内で調整し、新たな展開の目標を設定している点、評価できる。目標に合致した新コースを編成し、具体的な新カリキュラム案を構築できており、今後は実習先の開拓と連携をはかりながら、実現に向けて引き続き取り組んでいただきたい。

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：歴史学科

記入責任者：松浦典弘

基準：4-3	<評定> B <自己点検・評価委員会評定> B
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
卒業論文執筆に向けての個別指導の推進 「ゼミ」を大学での学びの要（かなめ）と位置づけ、発表や討議、レポート執筆を通じて、学生一人一人が、史・資料を読み解き課題に取り組む力や、自分の考えを表現する能力を身につける。	
[達成基準]	
卒業論文提出率を 90 パーセント以上とする。	
[行動計画]	
(1) オフィスアワーの活用のほか、全ゼミ生を対象とした個人面談による個々の学生に合わせた指導を行う。後期には各ゼミにおいて、少なくとも 1 回の個人面談を実施する。 (2) 長期休暇中の課題を課すことにより、「ゼミ」への取組の関心を持続させる（2 回生 4,000 字、3 回生 6,000 字、4 回生 8,000 字程度のレポート）。また、2 回生、3 回生には学年末にも同様の課題を課す。 (3) 「ゼミ」と講義や実践研究を関連づけて受講するよう履修指導を徹底する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
2013 年度の卒業論文提出状況は、87.3 パーセントであり、90 パーセント以上を達成することはできなかった。 学生との個人面談やレポートは各ゼミにおいて積極的に取り組んでおり、個別指導に活用してきた。しかしながら、一部ゼミでは個人面談ができておらず、また多くのゼミで欠席しがちな学生との面談を行うことができていない。このことが 10 パーセント以上の卒業論文未提出者を出すことにつながっているものと思われる。 長期休暇中の課題に関しては、全てのゼミで課すことができた。 履修指導に関しては全てのゼミにおいて行うように努めているが、学生の時間割に反映されていない場合も多い。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
各ゼミで面談など個別指導はきめ細かく行っており、レポートを課すことで卒業論文の完成を目指す取り組みは行っている。	
[改善すべき事項]	
結果的に卒業論文提出率が目標に達しなかったが、欠席しがちである学生への徹底指導により、論文を書くことへの意識を高めることが必要であろう。また、ゼミと講義や実践研究を関連付けて受講する件に関しても、より徹底した指導が必要である。	

**4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること**

2013 年度卒業論文提出状況一覧（歴史学科）教務課

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

**<所見>**

本項目について、「卒業論文提出率を 90 パーセント以上とする」という明確な達成基準の設定は評価できる。しかし、欠席しがちな学生への面談や履修指導の徹底などについては、より実効性のある具体的な計画をたて、実行に移すなど、目標の達成のために一層の努力が必要である。

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：文学科

記入責任者：池田 敬子

基準：4-1、4-2	<評定> S <自己点検・評価委員会評定> S
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
2012 年度に意見統一を見た「従来の 4 つのコースを残しながらも、カリキュラムは国文・中文コースと英文・独文コースの 2 本立てとする」（以後 12 年度案と称する）ことについて、国語と英語の教員免許取得がこれまで通り可能か否かの検討を行い、結論を出す。	
[達成基準]	
12 年度案の可否について決定すること。	
[行動計画]	
① 12 年度案に基づき、カリキュラム案を作成する。 ② カリキュラム案の科目の性格・科目数などが教員免許取得のための条件を満たせるか否かを、教務課の協力も得て検討・確認する。 ③ ②の結果により、国語・英語の教員免許取得を優先事項として 12 年度案継続か否かを決定する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
12 年度案に基づき、学科内を大きく 2 コースに分けるカリキュラム案を作成、関係事務部局と相談。英文・独文コースのカリキュラムでは、英語教員免許取得のための「教科に関する科目」の科目数が 50%に満たず、英語の教職課程認定は無理とのこと。よって 12 年度案は廃案との結論に至った。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
行動計画は達成したが、結果は残念ながら 12 年度案の廃案に至った。これによって、新たなカリキュラムの方向性が明確になり、グランドデザインカリキュラムとして完成させる道が拓けたことは、評価に値する。	
[改善すべき事項]	
結論が出るまでに、カリキュラム案の作成に多大の時間を消費したが、教職課程認定条件を早期に確認すべきであった。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
資料 1 2012 年度案に基づくカリキュラム	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<b>&lt;所見&gt;</b> 本項目については、目標、行動計画に基づく取り組みがなされ、12 年度案の可否の決定という達成基準は充足している。英語の教職課程認定という点から、12 年度案は廃案という残念な結果になったが、新たなカリキュラムの方向性が開けたことは、高く評価できる。

番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：文学科

記入責任者：池田 敬子

基準：4-1、4-2	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
大学全体のグランドデザイン推進とも関連させながら、12 年度案の狙いであった領域横断型科目の新設および「書く力」の養成科目を組み込んだ新カリキュラム案の作成。	
[達成基準]	
科目名・単位数・配当学年及び担当者を明記した新カリキュラム案の作成。	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 領域横断型科目の科目名決定。</li> <li>② 既存科目の名称検討、必要な場合は名称変更を行う。</li> <li>③ 単位数・学年配当について新規科目・既存科目を含めて検討し結論を得る。</li> <li>④ 「書く力」の養成科目は、12 年度報告にある通り、「文章表現法」として組み込む。</li> <li>⑤ 上記を踏まえてカリキュラムの全貌が見やすい案を作成する。</li> </ul>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
行動計画を踏まえて作業を行い、「グランドデザインカリキュラム改革案」を 7 月 10 日付けで副学長に提出した。ただし、担当者の明記には至っていない。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
小委員会・学科会議を重ね、カリキュラム案が完成したことは、効果が十分に上がったと言える。	
[改善すべき事項]	
現行カリキュラムと比較しての科目数増減が明記されていないこと、担当者が未決定であること、この 2 点が改善点である。14 年度実施予定とのことで提出を急いだが、2013 年 12 月に文学部長より 2015 年度実施との連絡があった。担当者決定は、拙速は許されないので 14 年度にじっくりと検討する。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
資料 2-1・2 「グランドデザインカリキュラム案について」及び「グランドデザインカリキュラム表」	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>本項目については、目標と行動計画のもと、着実に取り組んでいることが確認できる。達成基準にある担当者については未決定であるが、新カリキュラム案が完成したことは、評価できる。改善すべき事項等に留意しつつ、引き続き慎重に取り組んでいただきたい。</p>

番号 ③

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：文学科

記入責任者：池田 敬子

基準：4-2	<評定> B <自己点検・評価委員会評定> B
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
「書く力」養成のための科目「文章表現法」に関する具体的事項の決定	
[達成基準]	
配当学年・単位数・クラス分けの問題の決定及び担当者・担当方法の決定	
[行動計画]	
① 文学科小委員会において配当学年・単位数についての試案作成の後、学科会議で決定する。 ② クラス分けおよび担当者・担当方法の試案を小委員会から提案し、学科会議で決定する。 ③ 2014 年度入学生からの履修をめざすと実際の授業開始は 2015 年度となる。それまでに担当者グループでシラバス作成にあたるよう、依頼する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
行動計画①については 2 回生 2 単位と決定し、グランドデザインカリキュラム案に記載済み。 同②③については、今年度 2 月から検討を開始する予定であったが、カリキュラム実施が 2015 年からはとなり、さらに立案時には予想されなかった人事も発生したため、2016 年度実施を目指しての検討・決定事項とする。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
行動計画①は達成、決定をみた。	
[改善すべき事項]	
グランドデザインカリキュラムの実施時期の変更を今少し早く知るようにはすべきであったが、1 年延びたことで、新規着任の教員も含めて落ち着いて計画することが可能となった。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
資料 2-1 「グランドデザインカリキュラム案について」の「○文学科共通科目について」3 資料 2-2 「実践研究 A」欄	

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<所見>
本項目については、目標と行動計画のもと、取り組んでいることが確認できる。ただ、当初の実施予定の時期から 1 年間実施が延びたこともあり、達成基準にかかげている内容の多くが 2014 年度における取り組みとなっている。報告書②の内容とともに、引き続き慎重に取り組んでいただきたい。

番号 ④

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：文学科

記入責任者：池田 敬子

基準：4-1	< 評定 > B < 自己点検・評価委員会評定 > B
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
教員免許取得科目に関する検討	
[達成基準]	
「中国語」「書道」免許取得科目設置の可否についての最終決定	
[行動計画]	
<p>① 12 年度案では学科内を 2 コース編成にすることを以て、中国文学コースにおける「中国語」教員免許科目の設置を断念したが、「コース編成の見直し」如何によっては復活する。その場合は具体的作業を速やかに開始する。</p> <p>② 国文学コースにおける「書道」教員免許に関する事項を精査し、効果について検討の上、最終決定する。設置を決定すれば具体的作業を速やかに開始する。</p>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
<p>① 「中国語」教職課程認定申請を復活し、2015 年度への継続作業とする。</p> <p>② 国文学コースにおける「書道」教職課程認定申請は、断念する。理由は以下の通りである。</p> <p>文部科学省初等中等教育局教職員課『教職課程認定申請の手引き』によると最低限以下の科目とそれを担当する教員が必要である。</p> <p>書道（書写を含む）・書道史・書論・鑑賞）・「国文学・漢文学」（資料 4-2）</p> <p>それぞれ 1 単位以上計 20 単位の修得</p> <p>必要専任教員数 3 人（資料 4-1）</p> <p>現状では、「国文学・漢文学」の条件は満たせるが、中学校国語免許のための「書道（書写を含む）」の非常勤講師を擁するのみである。書道教職の「教科に関する科目」担当の専任を採用できる見込みどころか、非常勤を増員することもままならぬ状況であり、断念せざるをえない。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>国文学コースの書道教職については、結果は残念なものであったが、結論が出た。</p> <p>中国語については、本年度、本件担当者が在外研究で不在のため、具体的作業を延期せざるを得なかったが、グランドデザインカリキュラムの実施も遅れるとのことで、実害は発生しない。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>案が出たところですぐに『申請の手引き』を確認すべきであったが、グランドデザインカリキュラム作成に気を取られて、結論が遅れたことは遺憾である。</p>	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
資料 4-1・2・3	
文部科学省初等中等教育局教職員課『教職課程認定申請の手引き』平成 25 年度改訂版 該当部分コピー	



<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

本項目については、目標と行動計画のもと、取り組みはみとめられる。「書道」教員免許の可否については結果は残念であったが、結論にいたったことは評価できる。しかし「中国語」教員免許に関しては、具体的な作業はいまだ実施されておらず、目標の達成のために一層の努力が期待される。

番号 ⑤

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：文学科

記入責任者：池田 敬子

基準：6

<評定> A

<自己点検・評価委員会評定> A

## 1. 【2013 年度の目標等】

### [目標]

問題を抱えた学生（精神的な問題、病気や経済的な問題等）にどう対処するかについて、学科内で議論し、共通認識を形成する。

### [達成基準]

行動計画がすべて実行できたことをもって達成できたと判断する。

### [行動計画]

- ① 昨年度 1 回生担任より問題点と具体的対応の報告を学科全体で受け、一定の共通認識を形成する。それを踏まえて以下の努力をする。
- ② 1 回生：担任が緊密に連絡を取り合い、不適応学生の発見と適切な連絡・およびケアを行い、留年・退学等を余儀なくされる学生を減らす。
- ③ 2 回生：1 回生時の担任の努力を生かし、各コースにおいて出席状況と欠席理由を把握する。主に各コース演習Ⅱにおいて、1 回生時に問題のあった学生への見守りとケアを行い、新たな不適応に陥る学生が発生しないか注視し、学生への聞き取りやケアを行う。
- ④ 各コースで記録をとるなどして、次年度への指針となる資料を作成する。
- ⑤ 個人情報に深く関わる問題なので上記のすべてについて取り扱いを慎重にする。

## 2. 【2013 年度の達成状況報告】

- ① 12 年度及び 13 年度長期欠席者リストを確認し、更に 13 年度・14 年度 1 回生担任に調査を依頼した。また 2013 年度 2 回生については演習Ⅱの出席状況調査を各コースに依頼。12 年度担任からの前年状況の報告、及び今後の調査と記録作成の合意形成は、7 月の学科会議で行った。
- ② 1 回生：行動計画に基づき、担任・授業担当者がそれぞれに学生・父母への連絡を行い、学生との面談を行った。連絡の取れた場合もあれば、応答を得られなかったケースもある。また教員同士での情報交換も行った。
- ③ 2 回生：②に同じ。ただし、11 年度入学生にも 2 回生がいるので、彼らも対象にした。12 年度入学で 1 回生にとどまるものもいるが、彼らは 2 回生に含めた。
- ④ 後期試験終了時点から、調査の結果を持ち寄り、結果の校合をし、記録を作成した（資料 5）。記録は初めての試みなので、今後、よりわかりやすく書き込みのしやすい形を模索する。
- ⑤ 個人情報保護の問題に鑑み、記録は学生番号と氏名を記したものと、番号・氏名を伏せ、入学年度とアルファベット大文字で表記したものを作成。氏名付きは、プリントアウトして主任と各コース小委員が保存、記号表記分を資料 5 として報告書に添えた。またパソコン本体には残さず、メモリーに保存し主任が引き継ぐこととする。

<b>3. 【点検・評価】</b>
[効果が上がっている事項]
<p>行動計画①④⑤については、ほぼできたと言える。ただし②③については、教員個人のその時点時点での努力ではなかなか効果が現れない。学生と連絡が取りあえる信頼関係が構築されるまで時間がかかる場合があり、そもそも入学して僅かな期間のうちに姿を見せなくなる学生については非常に懸案である。また心の病を抱えている可能性もあって、積極的なコンタクトが裏目にでることもある。</p> <p>1・2 回生の授業担当者が個別に情報交換をする機会が増え、その中から 1 回生には入学時の履修登録などの指導を少人数グループに分けて行ってはどうかなど、新たな取り組みが発案されている。</p>
[改善すべき事項]
<p>現実の学期途中では教員の個人的情報交換にとどまることが多い。なかなか教員がゆっくり集合して学生の動向について話し合うゆとりがないからである。情報共有の方法について今後検討したい。</p> <p>また、教員は学生とのコンタクトをとる努力を熱心に続けているが、まだ、長期欠席や休退学者数を減らせるところまでにはいっていない。今後の効果に期待するところである。</p>
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>
<p>資料 5-1 2013 年度 1 回生の状況調査表</p> <p>5-2 2013 年度 2 回生の状況調査表</p> <p>これらについては個人情報に属することがらであるので、名前を伏せて添付する。</p>

<b>&lt;自己点検・評価委員会使用欄&gt;</b>
<p>&lt;所見&gt;</p> <p>本項目については、目標と行動計画のもとに、真摯に取り組んでいることが確認できる。問題を抱えた学生への対応について、資料を作成しながら、学科全体で共有する実践については特に評価できる点である。今後、長期欠席の学生や休学、退学者数の減少につながっていけるよう、引き続き取り組んでいただきたい。</p>

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：国際文化学科

記入責任者：番場 寛

基準：該当なし	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
学生の学習意欲を高めるとともに、受験生をより多く集めるため、学科の学習内容や教員の専門や関心を紹介するネットの「学科独自のホームページ」をリニューアルし、内外に広報する。	
[達成基準]	
多くの教員と、時には教員の指導のもとに学生たちもが書き込むことで、学生に自分の学科の教育内容と活動により関心を持たせる。それと同時に、学科独自のページは、リニューアル前は、1 日平均 30 名から 50 名のアクセス数だったものを、平均 100 名以上のアクセスがあるページにすることをめざす。	
[行動計画]	
演習（ゼミ）内容や教員の紹介、学科や学内所定機関の協力のもとで行われる行事紹介（「外国語カフェ」、「世界の食文化と宗教」のシンポジウム、新入生茶話会等）、留学や研修旅行の成果、卒論の題目と教員のコメント、また教員や、教員の指導のもとで学生によって書かれるブログ等の記事を投稿することで、内外に本学科の活動を知らせる。大学のホームページから学科独自のページへと閲覧者を導くように、大学のホームページの書き方を工夫する。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
学科独自のページへは、休日および長期休暇中を除き、平均して毎日の閲覧者が 100 名を超える。また、国際文化学科所属の教員と国際文化演習担当教員の全員が自己紹介と国際文化演習の紹介を書き込んだ。行動計画に記載した項目のうち、卒論の題目と教員のコメントを投稿する点に関しては、一部のゼミを除いては、まだ実現していない。それ以外はすべて実現できた。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
学科独自のページのアクセス数が増えたことでネットを通じての学科の広報活動は成果を上げていることが分かる。特に教員紹介のページや、学科行事の日の前後の該当ページへのアクセス数はそうした効果を着実に上げていることを示している。	
[改善すべき事項]	
「研修旅行の報告」について、学科独自のページにリンクを作成し、それが公開されている大学のホームページへ導くよう工夫したが、大学のホームページから学科独自のページへのリンクは作成されなかった。大学のホームページに「更に詳しい情報載せている学科独自のページがあります」という一文を載せてもらい、そこにリンクを作成し、学科独自へのページへと導く工夫をするよう要請を継続したい。	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
学科独自のページへのアクセス数を示すページのコピー。	

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

**<所見>**

「行動計画」に記されているように、演習（ゼミ）内容や教員の紹介、学科関連の行事や研修旅行・留学の紹介、あるいは卒論題目（テーマ）と担当教員のコメントなどの紹介は、受験生の関心を引くものと思われ、実際にホームページのアクセス数も確実に上昇してきており、評価できる。ただし、休日・長期休暇中をも含めて、ホームページの閲覧者が毎日平均 100 名を超えるようになれば、さらに望ましい。今後も引き続き、同様の成果が得られるよう取り組んでいただきたい。

番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：国際文化学科

記入責任者：番場 寛

基準：該当なし	< 評定 > A < 自己点検・評価委員会評定 > A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
<p>今年度発足した文化環境コースの新規開講科目、「環境文明論 1」、「環境と文化 1」および「国際文化概論」の文化環境分野の授業において、これまでそれぞれの国や地域の分野に縦割りされていた内容を幅広く連携させ、世界の地理や自然、気候といった国際文化学に必要な一般知識の習得を目指す。この新コースを学生募集力のあるコースとして位置づける。そのため、第 1 学年には文化環境学の学びの魅力を伝え、次年度のコース所属学生の確保に努める。</p>	
[達成基準]	
<p>文化環境コースへの所属は、2014 年度の第 2 学年から可能となる。今年度の新規開講科目において文化環境学の魅力を伝え、来年度の第 2 学年の文化環境コース希望学生を 10 名以上確保する。</p>	
[行動計画]	
<p>来年度の新規コース科目である「環境文明論 2」、「環境と文化 2」、「野外調査演習 1・2」、「国際文化演習 II-10a・b」の開講準備を進める。オープンキャンパスの文化環境コースの模擬授業において、文化環境学の学びの一端を紹介し、受験生の増加につなげる。前期の「環境文明論 I」、「国際文化概論 a」の授業や、年度末の学生の「演習 II」、「演習 III」の選択のための説明会で文化環境コースの魅力を説き、このコースへの登録学生を増やす。このコースで学んでいる学生の様子を学科独自のページで公開することでこのコースの魅力を伝えていく。</p>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
<p>2014 年度文化環境コース希望学生は、1 月末段階で 11 名に達した。今後 4 月までに希望未提出の学生やコース変更希望者が現れ、若干の増減もあると思われるが、10 名以上確保するという基準は、ほぼ達成できると見込まれる。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>学生のコース希望理由を見ると、「環境と文化 1」などの新規開講科目を受講して興味をもった学生がおり、コースの魅力が伝わりつつあるのが伺える。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>オープンキャンパスの模擬授業では、9 名の受講者を教えた。文化環境の模擬授業では過去最高であったが、来年度はさらに受講者数が増えるように努力する。</p>	
<b>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</b>	
コース所属希望学生の名簿	
<b>&lt; 自己点検・評価委員会使用欄 &gt;</b>	
<p>&lt; 所見 &gt;</p> <p>文化環境分野の授業を通して、また年度末の「演習 II・III」選択のための説明会などを通して、文化環境コースの魅力を伝えようとする努力が実を結び、2014 年度における新 2 学年の当該コース所属希望学生が、「達成基準」の 10 名を超えており（2014 年 1 月末時点）、評価できる。今後も引き続き、同様の成果が得られるよう取り組んでいただきたい。それとともに、文化環境学（文化環境コース）の魅力を受験生に伝えるための取り組みについても、工夫していただきたい。</p>	

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：人文情報学科

記入責任者：山本 貴子

基準：6	<評定> B <自己点検・評価委員会評定> B
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
2012 年度～2014 年度の目標 保証人との連携を強化 3 か年計画の 2 年目	
[2013 年度] 単位不足、あるいは成績不振の学生へは、年度末に保証人との面談を実施し、面談率を 90%以上にする。	
[達成基準]	
<p>(1) 入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明する。</p> <p>(2) 単位不足、あるいは成績不振の学生に対して、年度末に演習(ゼミ)担当教員が保証人との面談を実施し、面談率を 90%以上にする。</p> <p>(3) 成績表を保証人へ送付する際、わかりやすい説明書の原案を作成する。</p> <p>(1)・(2)・(3)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。</p>	
[行動計画]	
<p>(1) 入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明し、1 回生の授業担当教員を紹介する。</p> <p>(2) 単位不足、あるいは成績不振の学生に対して、年度末に演習(ゼミ)担当教員が保証人と面談する。 ○学科会議およびメーリングリストにおいて、各演習(ゼミ)での成績不振の学生に対する情報交換を行い、面談の実施状況を確認する。 ○面談で取り上げる内容について一本化を図る。 ○学生の成績情報について、教務課と情報交換を行い、連携を強化する。</p> <p>(3) 2・3 月の学科会議で成績表の説明書原案を作成する。</p>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
<p>(1) 入学式終了直後、講堂において保証人に説明し、1 回生担当教員を含む大多数の教員を紹介した。さらに、父母兄弟懇談会においても、参加された保証人とは話し合いが持てた。</p> <p>(2) 保証人との面談については完全に遂行できたとはいえない。 ○学科会議およびメーリングリストにおける情報共有については、低学年を中心に行った。 ○教務課との情報交換は不十分である。</p> <p>(3) 成績書の説明書原案については作成中である。</p>	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
<p>保証人との連携強化を図る体制作りができた。</p> <p>メーリングリストによって、かなりの情報共有ができた。</p>	



[改善すべき事項]

保証人との面談については、時間の調整が難しい。  
また、教務課・学生支援課と話し合う時間も必要である。

**4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること**

成績表説明書原案

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見> 単位不足を未然に防ぐため、またはその状態になった学生および保証人に対して、原因と対策を示すための具体的方策として本取り組みは有効であろう。引き続き、取り組みの実現を期待する。

番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：人文情報学科

記入責任者：山本 貴子

基準：4-3	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
2012 年度～2014 年度の目標 学生の学習意欲を喚起する。 3 か年計画の 2 年目 [2013 年度] 学科に関連の深い資格試験に合格させたり、学科で必須のタイピング技能を向上させたりすることで、勉強全体に対しても「やればできる」という積極的な姿勢を身に付けさせる。 科目によっては、その授業内容を「学び紹介」として公開し第三者からの評価を受けることで、授業に対するモチベーションを高める。 全学科生を対象とした授業の満足度・学習意欲の充実度についての面談を来年度前期に予定し、実施案を完成させる。 卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。	
[達成基準]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 学科に関連の深い資格試験を紹介し、興味のある学生に対しては受験対策を考える。</li> <li>(2) タイピングコンテストを実施し、コンテストに向けて練習させる。</li> <li>(3) 授業内容について、できるだけ「学び紹介」としてホームページその他に公開する。</li> <li>(4) 全学科生を対象とした個別面談については、今年度後期に実施案を完成させる。</li> <li>(5) 卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1)・(2)・(3)・(4)・(5)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。</li> </ol> </li> </ol>	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 学科に関連の深い資格試験について、3 号館入口にポスターを貼り紹介することで情報を公開する。さらに、興味のある学生に対しては演習(ゼミ)で受験対策を考える。</li> <li>(2) タイピング技能は学科にとって必要な技術であり、練習すれば誰もが技能の向上を図れるので、モチベーションを持たせやすい。演習(ゼミ)で技能の向上を図るよう促し、コンテスト情報を告知する。また、コンテストへの参加とともに、スタッフとしての参加も募り、コンテストの周知徹底を図る。</li> <li>(3) 授業内容について、オープンキャンパスなどを通じて「学び紹介」として公開する。</li> <li>(4) 全学科生を対象とした個別面談については、今年度後期に学内外の面談・アンケートについて調査し、来年度までに完成させる。</li> <li>(5) 1・2 月の学科会議で「成績優秀者」の定義を考え、3 月の学科会議で「成績優秀者」を決定する。</li> </ol>	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
(1) ①「情報検索基礎能力試験」及び「図書館情報学検定試験」について、今年度後期の初めにポスターを掲示し、山本ゼミで月曜 6 限(週 1 回)に受験対策講座を行った。その結果、「情報検索基礎能力試験」については、受験者全員が合格した。	

②池田ゼミでは、3年生のサブゼミで「IT パスポート」の受験学習を3号館 PC のみアクセスできる e ラーニング教材によって実施した。

③「3DCG 作成演習」でも「IT パスポート」対策を行った。

(2) 7月21日、オープンキャンパス時にタイピングコンテストを実施し、オープンキャンパス参加者及び学生が参加した。また、柴田ゼミでは、ゼミ開始直後にタイピングの練習をさせた。その結果、全員のタイピング能力が向上した。

(3) 松川ゼミが中心となって、松川先生、池田先生、伴先生、倉光先生の授業内容を「学び紹介」としてオープンキャンパスで公開した。

(4) 個別面談の実施案を考慮中。

(5) 表彰を検討中。

(6)新たに追加した行動

① ot プロジェクト

② ファッションイベント

③ Welcome Back to Campus 週間

④池田ゼミでは、

1. 「ネットワーク論」において、中間課題として「ICT 関係の新書を図書館で1冊借りて、その概要と感想を2回に分けてレポート」を課したところ、本に啓発されたとの感想が多く見られた。

2. 「デジタルコンテンツ論」にて、iPad で閲覧できる電子書籍の作成を課したところ、受講登録者約100人のうち90%が短編小説、絵本、写真付きエッセイ、料理レシピ等を作成し、佳作も多く学習意欲の向上が図られた。

⑤福田ゼミでは、

1. 卒業論文の前に Web アプリケーションないし Web サイトの卒業制作をしているが、卒業論文の口述諮問の前に全ての制作品を Web 上にアップして、主査・副査の先生が制作品を実際に試してみられるようにした。さらに、口述諮問の結果を受けて、指摘された改善点を修正したものを再度アップするようにした。これによって卒業制作のモチベーションの向上および質の向上に大きな効果が見られた。

2. ゼミ生から情報アシスタントとして4名に下級生の授業のサポートに参加してもらった。教えることを経験することによって、下級生のための e ラーニング Web アプリケーションを作成するのに必要な知見を得ることができると共に、実際に将来、ゼミや授業で使うことを目指す具体的な目標が明確になった。

### 3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

各ゼミが、それぞれできるところから取り組みを開始している。

[改善すべき事項]

まだすべてのゼミがすべての活動を行っているとは言い難い。

池田ゼミでは e ラーニング教材を使用したがる、そのコンテンツの学習刺激策が不十分なため効果が現れなかった。来年度はこれ以外の e ラーニング方法工夫する予定である（対面授業の後、ネットにある過去問をドリルさせる等）。

#### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

企画案 2種類（「ファッションイベント」「Welcome Back to Campus 週間」）  
タイピングコンテストのポスター

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>学科全体での資格試験受験への取り組み、学生およびオープンキャンパス参加の高校生も参加できるタイピングコンテスト、ファッションショーの画像・音声制作、そして Welcome Back to Campus 週間と、多様なアイデアを現実化している。試験の合格者などからも、取り組みが奏功していることがうかがえる。ゼミ毎の新たな取り組みがさらに学習意欲の喚起につながることを期待する。

番号 ③

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：人文情報学科

記入責任者：山本 貴子

基準：4-2	<評定> A <自己点検・評価委員会評定> A
<b>1. 【2013 年度の目標等】</b>	
[目標]	
2012 年度～2014 年度の目標 新コースの魅力を学生に伝え、内容を周知する。 3 か年計画の 2 年目 [2013 年度] 授業の一環として、図書館および図書館関連組織に所属している人たちを講師として、年 2 回の講演会を開催し、それらの組織の見学を実施する。	
[達成基準]	
(1) 図書館および図書館関連組織に所属する人の講演会を開催し、現場の状況を理解させる。 (2) 図書館および図書館関連組織の見学を行うことで、図書館業務を身近に感じてもらう。 この(1)・(2)によって、図書館業務の多様性と奥の深さ、図書館はそれだけで成り立っているのではなく図書館に関連の深い組織が支えているということ気付かせる。 (1)・(2)両方が実施できた時に、達成できたと判断する。	
[行動計画]	
(1) 講演会について、なるべく多くの学生、すなわち人文情報学科以外に図書館学課程および司書教諭課程受講者へも参加を呼び掛ける。講演内容に沿って、予め学生に調査させ、簡単なレポートを書かせる。講演者へは、レポートの内容を盛り込んだ講演を依頼し、最後に質疑応答をしてもらう。人文情報学科以外の学生も参加可能としておくことで、様々な立場の学生の意見を聞くことができ、これによって、学生の理解度と満足度を高める。 (2) 予め、見学する組織について調査し質問を考えさせてから見学を実施する。見学終了後は、チームで見学内容を話し合う。これによって、学生の理解度を高める。	
<b>2. 【2013 年度の達成状況報告】</b>	
(1) 図書館学課程と合同で、ケンタッキー大学図書館で資料保存を行っている図書館員を招いて講演会を行った。事前に、学生から質問事項を提出してもらい、講演会当日は、講演者にその質問にも答えてもらった。また、終了後、レポートを提出してもらったので、現場の状況を理解してもらえたと考ええる。 (2) 司書教諭課程と合同で、烏丸中学校図書室を見学した。この見学会でも、予め図書室の担当教諭へ質問を送り、見学当日は、その質問に答えてもらう形で進めた。 (1)・(2)の両方を行ったが、(1)については 1 回だけだったので完了したとは言えない。	
<b>3. 【点検・評価】</b>	
[効果が上がっている事項]	
昨年度考えた内容を 2 種類ともこなせたことで、学生へは、図書館の機能についてある程度理解が図れたと考える。	

**[改善すべき事項]**

今年度は、デジタルライブラリーコース初年度だったため、演習その他、専門的な内容の授業が行えず、当初計画したことができなかった。

**4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること**

デジタルライブラリーコース講演会ポスター  
烏丸中学校への依頼状

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>講演会と図書館関連施設見学を実現していることは評価できる。その上、単なる受動的な参加ではなく、講演内容や見学施設についての予めの調査などを組み合わせていることによって、学習効果の積極的な促進が企図されている。なお、講演会の回数については、目標達成が求められる。

番号 ①

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：教育・心理学科

記入責任者：関口 敏美

基準：6

<評定> A

<自己点検・評価委員会評定> A

### 1. 【2013 年度の目標等】

[目標] 教職志望者のキャリアサポート体制の充実をはかる。

1 年生・2 年生はゼミと「教職学習会」(月イチ開催)で、3 年生・4 年生はゼミと「教職直前講習」など、教職支援センターやキャリアセンターとも密に連携をとりつつ、学生が自らキャリアデザインに取り組めるよう学年進行に合わせたキャリアサポートを行う。

[達成基準]

①～③の行動計画がすべて終了したことをもって達成されたと判断する。

[行動計画]

- ①自発的なグループ(教職勉強会など)のサポート
- ②学校ボランティアを希望する学生のサポート
- ③教育職員採用試験に関する情報の共有(教職支援センターと)

### 2. 【2013 年度の達成状況報告】

①学生が試験対策をはじめのが全般的に遅いため、学科会議にてゼミで 3 年生の希望者を対象とした勉強会を呼びかけてはどうかと提案した。その結果、オフィスアワーや水曜放課後(会議のない日)の時間を活用して、後期から 5 つのゼミで勉強会が発足した。あるゼミでは、基本的には学生たちで問題集を解いていく(わからないときにはゼミ教員がヒントを与える)形式をとるが、一定の場所(ゼミ教員の個人研究室)に定期的に(月 2～3 回)集まることで、試験勉強の習慣化をめざしている。

②現在、教職支援センターと連携して京都市・京都府の小学校・幼稚園に学校ボランティアとして学生を紹介・派遣している。それとは別に、「初等教育実践論 I・II」で 1 年生をボランティアに送り出している(授業は火曜 3 限だが、4・5 限も活動にあてる)。前期は必修科目と重なり 3 名しか受講者がいなかったが、後期は 20 名が受講した。ボランティア先は教員が紹介し、面接のアポ取りなど小学校への連絡は学生が行い、授業補助・クラブ補助など週一回の活動を行った。その際、学校ボランティアに関する悩み(児童との人間関係・ボランティア間の人間関係など)を相談に来る学生に対しては、授業担当者が相談に乗りフォローを行っている。

③3 名の教員が教職支援センターミーティングで報告された直前講習(4 年生対象)の受講状況や教採受験状況などを持ち帰り、学科会議(教職課程初等部会も兼ねる)にて共有している。

### 3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

①学生だけで勉強会を思い立っても、適当な場所がなかったり、3 回以上続かなかったり、過去間が分からなくて挫折するなど継続しにくい要因があったが、ゼミ教員が関わることで、定期的に勉強会を行う環境が整えられた。オフィスアワーや水曜放課後などを利用した限られた時間ではあるが、わからない時はゼミ教員に質問できる環境で仲間と学び合うことを通して着実に勉強に取り組んでいる。

②日々の活動は「学校ボランティア日誌」に記録させているが、学期末に活動報告会を実施して、どのような活動を行い、体験から何を学んだかを相互にふりかえる機会を設けた。これにより、以前は気づかなかったことや分からなかったことの意味が見えてくるようになり、学習効果があがった。



ボランティアをめぐる悩み相談については、前期から受講している学生の事例をあげる。

相談内容から個人が特定される恐れがあるため、相談内容については公表を差し控える

なお、2013年度の学校ボランティア活動をした学生はのべ210名である。

③全般に教員の理解が深まり、ゼミを通じて教職支援センター主催の説明会などへ参加を促している。

[改善すべき事項]

①まだ一部のゼミで勉強会のサポートが実現したにすぎないので、学科全体に広げていきたい。

②個人または少人数でボランティアに行くと適度な緊張感を保ちつつ活動できるが、大人数になると気がゆるんで学内生活の延長のようになり、学外で学ぶ効果が半減するように思われる。受入れ先の要望にもよるが、なるべく同一時間帯に同じ学校に複数の学生を送らないように調整すべきである。

**4.【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること**

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>教職試験のための勉強会を個々の学生に任せるとはならず、教員が定期的に関与しサポートするゼミが増えたことは高く評価できる。次年度には、このノウハウを学科内で共有し教職を目指す全ての学生が参加できるようにしていくことで学生の満足度も向上するであろう。学校ボランティアの相談は効果があることが分かるが、まだ特定授業でのサポートのみであるので、学科全体での取り組みとして実施していくことが望まれる。

番号 ②

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：教育・心理学科

記入責任者：関口 敏美

基準：4-2

<評定> A

<自己点検・評価委員会評定> A

### 1. 【2013 年度の目標等】

[目標] 教育体制の整備を行う。

保育士資格取得希望者に対して引き続きサポートを行うと共に、保育士養成課程の設置について、幼児教育保育科と連携しながらカリキュラムの作成に向けて具体的な検討を重ねる。

[達成基準]

- ①は、行動計画の終了をもって達成されたと判断する。
- ②は、今後の展望について共通認識を持つことで達成されたと判断する。
- ③は、申請手続きの終了をもって達成されたと判断する。

[行動計画]

- ①保育士資格試験の受験サポート
- ②幼児教育保育科と協同で大谷大学における保育士養成に関するワーキングの実施
- ③特別支援(一種)の課程認定申請

### 2. 【2013 年度の達成状況報告】

①教職支援センター・実習支援センター・キャリアセンターと連携して幼稚園希望者に関する情報を共有し、東京アカデミーの講習、公立採用試験模試・解説講座など保育士資格試験の受験サポートを行った(具体的なサポート状況については、根拠資料参照)。

②2012 年度から始まった 4 年制の資格取得課程設置に向けて引き続き取り組んだ。2013 年度 4 月に副学長より幼児教育保育科の教員と協同で本学における保育士養成ワーキングを実施するよう指示を受けた。そこで、幼児教育保育科から学科主任他 2 名が、本学科から学科主任他 2 名が参加して、前期に計 4 回のワーキングを行った(5 月 1 日、5 月 23 日、6 月 13 日、7 月 4 日)。幼児教育保育科の保育士養成の伝統に学びつつ、2 年制養成と 4 年制養成の長所を生かす方向で問題点を検討し、本学における保育士養成について、副学長宛の報告書を作成した(具体的なことは根拠資料を参照のこと)。

③文部科学省への特別支援(一種)の課程認定書類の提出を完了し、2014 年 2 月 24 日付で課程が認可された。2014 年度入学生より特別支援(一種)免許状を取得することが可能となった。

### 3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

- ①保育士資格試験の受験サポートは当初計画通り実行できた(講習受講者数については根拠資料参照)。
- ②ワーキングを経て、本学における保育士養成について、問題点も含めて共通認識を持てたこと。
- ③特別支援(一種)の課程が認可され、教職希望者に付加価値をつけることが可能になったこと。

[改善すべき事項]

①保育士資格試験の受験者数とその結果について教職支援センターに問い合わせたところ、学生が自己申告してきたケースしか把握していないとのことであった。そこで次年度からは、幼稚園希望者の事前指導のうちに受験者数とその結果について調査する必要がある。この意味で、個人面談を実施し、個別指導の必要な学生にはさらにきめ細かなサポートを行う必要があると感じた。

②4年制の保育士養成に取り組むこと。現状では、全体計画との関連で本学科が関わるべきである。

#### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

①については、「教育・心理学科 各種試験 受験サポート参加者」参照

②については、「大谷大学における保育士養成報告書」(2013年7月13日提出)参照

#### <自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>行動計画は概ね達成されていると思われる。特に保育士養成ワーキングでの議論の積み重ねは、問題点を浮き彫りにし、幼児教育保育科との連携も取られ、今後の目標や行動計画に有効な指針を与えるものと評価できる。ただし各種講座などを受講した人数は母数が示されていないので規模が分かりづらい。また学生の自己申告に基づいているなど、統計としての不備な部分があるので、今後はより正確な情報の把握を心掛けて欲しい。

番号 ③

2013 年度 自己点検・評価報告書

組織名：教育・心理学科

記入責任者：関口 敏美

基準：6

<評定> B

<自己点検・評価委員会評定> B

### 1. 【2013 年度の目標等】

[目標] 心理学コースの学生に対するキャリアサポート体制の充実をはかる。

教職をめざさない学生のサポート体制充実のため、キャリア教育および就職先について、心理学科を持つ先発校の事例を収集して分析し、心理学出身者が多く就職している職場に必要な資格・能力について明らかにする。

[達成基準]

行動計画①②の終了をもって達成されたと判断する。

[行動計画]

①近畿圏の他大学の事例収集と分析

②教職をめざさない学生のキャリアサポート(キャリアセンターと連携)

### 2. 【2013 年度の達成状況報告】

①京都の仏教系大学 2 校のホームページから心理学コースの進路・就職情報を収集した。その結果、進路・就職先として、A 大学では医療系が多く、B 大学では民間企業が多いことが判明した。それぞれの大学の特徴、取り組みの方向性及び学生のニーズなどの要因が関係しているものと推察できる。

②入学時に「大学生基礎学力調査」を全員に受けさせ、キャリア教育の第一歩としている。学科の性格上、教職希望者には様々なサポートがあるが、教職をめざさない学生(心理学コースの者が多い)向けに教職以外の進路について、もっとサポートする必要があると学科会議で話題になった。そこで学生が主体的にキャリア形成に取り組むことができる環境作りの一環として、学年段階に応じたキャリアセンターの説明会・受験講習などの情報を、演習 I～IV の授業の際にこまめに学生たちに伝達し、教職以外の就職活動に向けた情報提供を積極的に行った。

### 3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

①他大学の事例から、各大学の特徴、取り組みの方向性及び学生のニーズ等の要因が関係していることが明らかになった。

②教職希望者が多いため、非教職希望者に就活のモデルを提示しにくい面があったが、演習 I～IV で意識的に情報伝達に努めた結果、学生がキャリアセンターの企画に意欲的に参加するようになった。

[改善すべき事項]

①本学心理学コース学生の進路・就職希望調査や支援内容に関するニーズ調査が必要と考えられる。

②現状では、ゼミ対象の出前就職ガイダンスを十分に活用していないので、この後は出前ガイダンスを積極的に利用して、学生自らが十分にキャリア形成できるようにサポートを行う必要がある。

### 4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

①については「近畿圏他大学における心理学コースなどの進路などについて」参照のこと

**<自己点検・評価委員会使用欄>**

<所見>近畿圏の他大学の情報収集が二校しか行われていないのは、情報収集としては不十分である。また各大学のホームページにおける情報も、正確さに違いがあると予想されるので、情報収集の方法も検討の余地がある。また、教職を目指さない学生の人数が明示されていないが、サポート対象の学生を明確に把握するためには必要な情報である。今後は、学科として、より組織的な取り組みを行っていくことが望まれる。